

# 相聞歌の系譜

高野正美

## 一 はじめに

宮廷社会に成立した和歌は貴族・官人社会から周辺庶民社会へ、都京から地方へと波紋状に広がっていったが、相聞歌もこの流れに沿って展開している。その淵源は原理的には神と巫女との掛け合いにあると想定でき、その具象化されたものが民間に行われていた歌垣であった。宮廷社会に見られる天皇と后、女王、采女など、周辺の女性たちとの歌のやりとりも歌垣などの習俗を媒介として形成されたものだが、服属という政治的要素が加わることで儀礼的性格を帯びたものとなっている。雄略記に見られる三重の采女の寿歌はその典型であり、この伝統は天皇と宮廷の女性たちとの贈答として万葉集にも継承されているが、この時点では儀礼的性格は後退し、代わって社交的・挨拶的なも

のとして新たな宮廷の伝統となっている。貴族・官人社会に波及すると、貴族・官人と遊行女婦の贈答に明らかかなうに、この動向はいつそう顕著となる<sup>①</sup>。

このように相聞歌には、ごく大まかには儀礼的なものから社交的なものへという大きな流れが見られるが、相聞歌の内側から見ると、ここから派生した起居相聞の歌も一つの大きな流れを形成している。

## 二 起居相聞の様相

「起居」とは字義としては「動静、起臥、安否」の意であり、中国には起居状という「日常生活の有様を記した書」(諸橋轍次「大漢和辞典巻十」)もある。「相聞(問)」とは、便りをし、様子を尋ねる意であり、ここでいう「起居相聞」も日常生活の有様を尋ねることの意で用いている。万

葉集にも安否を尋ねる意で「起居を相問す」〔相問起居〕巻四・六四九の左注とある。この場合は叔母・甥の關係にある大伴坂上郎女と大伴駿河麻呂との間で交わされた恋歌風の贈答であるが、いわゆる恋人同士による恋歌の贈答ではなく、相互の絆や親密な關係を確かめあったり、深めたりするものである。また、坂上郎女と安部虫麻呂とは母親が姉妹同然の間柄であったことから二人も親しい關係にあり、恋歌のやり取りをしているが、これについても「いささかに戯歌を作りて問答をなせり」〔聊作戯歌以為問答也〕巻四・六六七の左注とあるように、この場合も男女の恋による贈答ではない。これらは左注によらなければ恋人同士の贈答、問答と区別できないが、その内実は起居相聞であることからすると、万葉集中にはそれと知られないままにこの種の歌が含まれている可能性は高い。

題詞や歌の表現から起居相聞と位置づけられる歌も多く、それは初期万葉の時代に遡ってみられる。(以下万葉集の歌に付した番号は末尾の表2の歌と対応させたものである)

2 天皇、藤原夫人に賜ふ御歌一首

我が里に大雪降り大原の古りにしりに降らまくは  
後(2・103)

藤原夫人の和へ奉る歌一首

我が岡の霰おかみに言ひて降らしめし雪の摧くだけしそこに散

りけむ(2・104)

これは天武天皇と藤原夫人の贈答で、大和では珍しい降雪を契機とした消息のやり取りであり、この贈答を通した軽い戯れによつて結果的に夫婦の絆をより確かなものとしている。典型的な起居相聞歌といえよう。次も同様である。

3 吉野宮に幸せる時に、弓削皇子、額田王に贈り与ふる歌一首

古いにしへに恋ふる鳥かもゆづるはの御井の上より鳴き渡り行く(2・111)

額田王の和へ奉る歌一首 倭京より進り入る

古に恋ふらむ鳥はほととぎすけだしや鳴きし我が思へるごと(2・112)

吉野より蘿生せる松が枝を折取りて遣る時に、額田王の奉り入るる歌一首

み吉野の玉松が枝ははしきかも君が御言を持ちて通はく(2・113)

2の「雪」に相当するのが、ここでは鳥(ホトトギス)であり、漢籍の故事を共有する者同士が、ホトトギスや蘿生した松の枝を媒介として歌を交換し、より親密な關係を構築している。これは男女という対の關係を越えた人と人との結びつきによる贈答で、起居相聞の特徴をよく示している。

こうした起居相聞の贈答が宮廷社会に定着し、やがて広く貴族・官人社会に定着すると、知識人の間では男同士の贈答が行われるようになる。男同士の贈答は「交友歌」と呼ばれ、それらが恋歌的であることから論議の対象となっている。特に家持と池主をめぐっては同性愛（ホモセクシャル）の関係が指摘<sup>2</sup>されたり、中国文人の交友観を共有する者同士による贈答で、文学的営みであるともいわれている。一方、家持の表現は恋歌風ではあるが、異性間の恋情表出とは異なるとの指摘<sup>1</sup>もある。

これらに共通するのは、交友歌は中国文人の交友詩を媒介として成立したということだが、交友詩に倣って交友歌が成立したとしても、それは単に中国文学の影響下に成ったというのではない。他文化を自文化に受け入れるためには受け入れる側にそれを可能にする環境（受け皿）がなければ不可能である。この環境（受け皿）に相当するのが起居相聞の伝統である。そこで改めて起居相聞歌の様相について考えてみると、次のような例もその範疇に入るかと思われる。

4 大神大夫、長門守に任せらるる時に、三輪川の辺に集

ひて宴する歌二首

三諸の神の帯ばせる泊瀬川水脈し絶えずは我忘れめ

や（9・一七七〇）

後れ居て我はや恋ひむ春霞たなびく山を君が越え去  
なば（9・一七七二）

5 大神大夫、筑紫国に任せらるる時に、阿倍大夫の作る

歌一首

後れ居て我はや恋ひむ印南野の秋萩見つつ去なむ児  
故に（9・一七七二）

4は送別の宴における贈答であるから、起居相聞そのものではないが、「相聞」に分類されているので、ここではその範疇のものと見ておく。前者は大神大夫の歌、後者は女性の立場の詠とも見られ、5も同様に想定できるが、次の例と対比するとむしろ男同士の贈答と見なせる。

11 大宰帥大伴卿、大納言に任せられ、京に入らむとする

時に、府の官人ら、卿を筑前国の蘆城の駅家に饑する

歌四首

み崎廻の荒磯に寄する五百重波立ちても居ても我が  
思へる君（4・五六八）

右一首、筑前掾門部連石足

韓人の衣染むといふ紫の心に染みて思ほゆるかも  
（4・五六九）

大和へに君が立つ日の近づけば野に立つ鹿もとよめ  
てぞ鳴く（4・五七〇）

右二首、大典麻田連陽春

月夜よし川の音清しいぎここに行くも行かぬも遊び  
て行かむ(4・五七二)

右一首、防人佑大伴四綱

第一、二首は女性の立場の詠とも見られるが、第三、四  
首も同じ送別の宴席でのものであり、第一、二首のみを強  
いて女性の立場に擬する必然性はない。

12

大宰帥大伴卿の京に上りし後に、沙弥満誓、卿に贈る  
歌二首

まそ鏡見飽かぬ君に後れてや朝夕にさびつつ居らむ  
(4・五七二)

ぬばたまの黒髪変はり白けても痛き恋にはあふ時あ  
りけり(4・五七三)

大納言大伴卿の和ふる歌二首(以下略)

これは交友歌といわれるもので、恋歌と見紛うことから、  
女性の立場の詠といわれたりするが、先掲歌に照らしてみ  
ると、むしろ同性同士でも親交の表現は恋歌的になる場合  
があると見たほうがよい。このことは次の歌を加味すると  
より明らかである。

14

余明軍、大伴宿禰家持に与ふる歌二首 明軍は大納言卿の  
賓人なり

見まつりていまだ時だに変わらねば年月のごと思ほ  
ゆる君(4・五七九)

あしひきの山に生ひたる菅の根のねもころ見まく欲  
しき君かも(4・五八〇)

歌の内実は恋歌的であるが、仕えている主人の子息に与  
えるという状況から見ても、恋歌でないことは明らかであ  
る。

21

遠江守桜井王、天皇に奉る歌一首

九月のその初雁の便りにも思ふ心は聞こえ来ぬかも  
(8・一六一四)

天皇の報和へ賜ふ御歌一首

大の浦のその長浜に寄する波ゆたけき君を思ふこの  
ころ(8・一六一五)

この場合にも恋歌的な雰囲気は漂っていることなどから  
して、起居相聞歌も親密な関係にあつては、親交を深める  
表現は恋歌のそれと質的に近似するものであつたために、  
しばしば女性になぞらえての表現として誤解されてきた。  
家持と池主の恋歌風の贈答もこうした起居相聞の動向に沿  
って詠み交わされたもので、辰巳氏のいうように中国文人  
の交友観を共有しての文人気取りでの贈答であつた。

起居相聞は女性同士の間でも見られる。

23

大伴田村家の大嬢、妹坂上大嬢に贈る歌四首

外に居て恋ふれば苦し我妹子を継ぎて相見む事計り  
せよ(4・七五六)

遠くあればわびてもあるを里近くありと聞きつつ見ぬがすべなき(4・七五七)

白雲のたなびく山の高々に我が思ふ妹を見むよしもかも(4・七五八)

いかならむ時にか妹をむぐらふの汚きやどに入れいませせてむ(4・七五九)

右、田村大嬢と坂上大嬢とは、ともにこれ右大弁大伴

宿奈麻呂卿の女なり。卿、田村の里に居れば、号けて

田村大嬢といふ。ただし、妹坂上大嬢は、母が坂上の

里に居れば、仍りて坂上大嬢といふ。時に姉妹諮問ふ

に歌を以て贈答す。

京師より贈来する歌一首

山吹の花取り持ちてつれもなく離れにし妹を偲ひつるかも(19・四一八四)

右、四月五日に留女の女郎より送れるなり

京人に贈る歌二首(一首略)

妹に似る草と見しより我が標めし野辺の山吹誰れか手折りし(19・四一九七)

右、留女の女郎に贈らむために、家婦に誂へられて作る。女郎は即ち家持が妹。

女性同士の場合も恋歌的であり、特に男の立場で詠まれたものではないことからしても、起居相聞歌の多くは恋歌

の表現に倣つて詠まれたために、区別しがたいものとなっている。というよりも、情愛の機微を尽くす表現は恋情も親交の情も類同の表現になりやすいことから截然と区別しがたいのだといえよう。それは次のような例に端的に見られる。

15

大伴宿禰駿河麻呂の歌一首

ますらをの思ひわびつつ度たひまねく嘆く嘆きを負はぬものかも(4・六四六)

大伴坂上郎女の歌一首

心には忘るる日なく思へども人の言こそ繁き君にあれ(4・六四七)

大伴宿禰駿河麻呂の歌一首

相見ずて日長くなりぬこのころはいかに幸くやいふかし我妹(4・六四八)

大伴坂上郎女の歌一首

夏葛の絶えぬ使ひのよどめれば事しもあるごとと思ひつるかも(4・六四九)

右、坂上郎女は佐保大納言卿の女なり。駿河麻呂は、

この高市大卿の孫なり。兩卿は兄弟の家、女孫は姑姪の族なり。ここを以て歌を題りて送答し、起居を相聞す。

これらは左注によらない限り、男女一般の恋歌と区別で

きないが、恋歌と起居相聞歌とは表現上からは見分けることが不可能な場合もあり、その識別はもっぱら左注等による状況判断によらざるを得ない。起居相聞歌が恋歌から派生したものである以上当然であろう。

### 三 起居相聞歌の特徴

起居相聞歌に特徴的な傾向として見られるのは、男女共に同性同士でイモ、セと呼び合っていることである。たとえば、次は房前が旅人を「我が背子」と称した例である。

7

跪きて芳音を承り、嘉懽交深し。乃ち龍門の恩、また蓬身の上に厚きことを知りぬ。恋望の殊念は、常の心の百倍なり。謹みて白雲の仕に和へて、野鄙の歌を奏す。房前謹状す。

言問はぬ木にもありとも我が背子が手馴れの御琴地に置かめやも(5・八一)

これは万葉第四期以降に顕著な傾向であり、現存の資料では大伴氏、とりわけ家持関係歌に多い(末尾の表2参照)。この呼称は起居相聞歌のみの特徴ではなく、それ以外の歌でも男同士で「セ(コ)」と称した例がある。

ア

長屋王の故郷の歌一首  
我が背子が古家の里の明日香には千鳥鳴くなり孀待ちかねて(3・二六八)

イ

右、今案ふるに、明日香より藤原宮に遷る後に、この歌を作るか

長田王、筑紫に遣はされて、水島を渡る時の歌二首(一首略)

芦北の野坂の浦ゆ船出して水島に行かむ波立つなゆめ(3・二四六)

石川大夫の和ふる歌一首 名欠けたり

沖つ波辺波立つとも我が背子が御船の泊り波立たためやも(3・二四七)

右、今案ふるに、従四位下石川宮麻呂朝臣、慶雲年中に大弐に任ず。また、正五位下石川朝臣吉美侯、神龜年中に小弐に任ず。兩人の誰れのこの歌を作るかを知らず。

ウ

丹比真人笠麻呂、紀伊国に往きて勢能山を越ゆる時に作る歌一首

栲領巾のかけまく欲しき妹の名をこの勢能山にかけばいかにあらむ(3・二八五)

春日藏首老の即ち和ふる歌一首

宜しなへ我が背の君が負ひ来にしこの背の山を妹と呼ばじ(3・二八六)

アの「我が背子」は誰とも特定できないが、明らかに男同士の関係で用いられたもので、本来の用法とは違ってい

る。雑歌に分類されているが、或いは起居相聞歌であったかもしれない。イは石川大夫が長田王を「我が背子」と称した例で、奈良朝以前の作であろう。ウは春日老が丹比笠麻呂を「我が背の君」と称したもの。紀伊行幸は持統四年（七九〇）と大宝元年（七〇二）に見られ、前者か<sup>5</sup>と見る向きもある。

男同士による「我が背子」との呼称は起居相聞歌では房前の歌が早い時期のものだが、アウは万葉第二期の作と想定できるので、官人同士の間では比較的古くから本来の用法を離れて「セ（コ）」の語が用いられていたと見なせる。房前の場合も、こうした官人社会の風潮の中で用いられたもので、その動向を受けて家持や池主等の歌も詠まれている。

起居相聞歌以外でも「我が背子」と称した例は天平五年の入唐大使丹比広成を「我が背子」と称する例（巻19・四二四五）や、橘諸兄の巨曾部対馬に對するもの（巻6・一〇二五）、相手は不明だが恵行の作（巻19・四二〇四）等があることから見て、当時官人社会では一般的なことであったようだ。

以上の経過からすると、「セ（コ）」と表現されていることを根拠にして、単純に女性の立場からの詠作と断定することは出来ないことになる。この点は「イモ」の呼称につ

いてもほぼ同様である。

エ 橘朝臣奈良麻呂、集宴を結ぶ歌十一首（部分）

もみち葉を散らすしぐれに濡れて来て君が黄葉をかざしつるかも（8・一五八三）

右の一首、久米女王

露霜にあへる黄葉を手折り来て妹はかざしつ後は散るとも（8・一五八九）

右の一首、秦許遍麻呂

オ

冬の日に靱負の御井に幸しし時に、内命婦石川朝臣、詔に應へて雪を賦する歌一首 諱を邑婆といふ

松が枝の地に着くまで降る雪を見ずてや妹が隠り居るらむ（20・四四三九）

ここに、水主内親王寝膳安からずして、累日参りたまはず。因りてこの日を以て、太上天皇侍孀らに勅して曰く、「水主内親王に遣らむために、雪を賦し歌を作り奉獻れ」とのりたまふ。ここに諸の命婦等歌を作るに堪へずして、この石川命婦のみ独りこの歌を作りて奏す。

エは宴席で女性をイモと呼ぶ例。この場合イモと呼ばれるのは遊行女婦とも想定されているが、その宴に列席した久米女王を指すと見るのが自然である。オは応詔歌で、女性同士でイモと呼ぶもの。女性同士でイモと称する例は大

伴一族間の起居相聞に多い。先述の23・43はその典型で、28(表2)の紀女郎が友をイモと呼ぶのも(巻4・七八二)この例に入るかと思われる。

イモ・セについては日本書紀にも記事がある。

「母にも兄、吾にも兄、弱草の吾が夫唵令」(仁賢紀六年秋)

〔割注〕古は兄弟長幼を言はず、女は男を以て兄と称ふ。男は女を以て妹と称ふ。故「母にも兄、吾にも兄」と云へらくのみといふ。

割注によると、当時女は男をセといい、男は女をイモと云ったとあり、エはこの用法といえる。ただ、この注記は男女一般の關係での呼称ではなく、親族の間での呼称であったとも理解できる。そうだとすると才はそれとも違った用い方である。

以上、万葉の動向を辿つてくると、元々恋人同士や夫婦間の呼称であつたイモ・セは、万葉時代の早い頃から一部で本来の用法とは違つた用い方をしていたことが分かる。起居相聞歌に見られるイモ・セの呼称の多くは本来の用法を離れて用いられているもので、この特殊な言葉を用いることで親密な人間關係の構築をはかり、親交を深めようとしたのだといえる。つまり、起居相聞歌のイモ・セは親愛のことばとして用いられたものである。したがって、家持

と池主の場合もそれぞれ異性の立場に立つて詠んだといわれたりするが、見直す必要がある。青木生子氏は家持と池主について「恋歌の伝統の表現を内包しつつ、交友の情を尽くす表現を成立させている」といい、特に女性の立場や心情を意識したものではないといわれる。この指摘は以上の経過からして首肯できる。

こうした万葉の起居相聞を和歌史の上に位置づけるには、平安和歌の動向を視野に入れる必要がある。

#### 四 平安和歌に見られる起居相聞

もとより平安和歌には「相聞」という分類はなく、万葉の概念を当てはめるのは適當とはいえないが、ここでは類似的状況下で詠まれたものを起居相聞歌として抽出すると、当面次のようなものがあげられる。

a 深草の里に住み侍て、京へまうで来て、そこなりける人に、よみて、贈りける

年をへて住みこし里をいでて去なばいとゞ深草野とやなり南 (業平)

返し 読人しらず

野とならばうづらとなきて年は経むかりにだにやはきみは来ざらむ (古今巻18・九七一、九七二) (雑歌下)

b 題しらず 贈太政大臣



深き思ひ染めつと言ひし事の葉は何時か秋風吹きて  
散りぬる

返し

伊勢

心なき身は草木にもあらなくに秋来る風に疑はるら  
ん

〔後撰卷18・一二七三、一二七四〕(雑四)

c

神な月許に、大江千古がもとに、「あはむ」とてまかり  
たりけれども、侍らぬほどなれば、かへりまできて、  
たづねてつかはしける

藤原忠房朝臣

もみぢ葉は惜しき錦と見しかども時雨とともにふり  
でてぞ来し

返し

大江千古

もみぢ葉も時雨もつらしまれに来て帰らむ人を降り  
やとゞめぬ

〔後撰卷8・四五四、四五五〕(冬)

d

近隣なる所に方違へにわたりて、宿れりと聞きてある  
ほどに、事にふれて見聞くに、歌詠むべき人也、と聞  
きて、これが歌詠まんさまいかでよく見む、と思へど

も、いとも心にしあらねば、深くも思はず、進みても

言はぬほどに、かれも又心見むと思ければ、萩の葉の

紅葉たるに付けて、歌をなむをこせたる

女

秋秋の下葉につけて目に近くよそなる人の心をぞ見  
る

返し

貫之

世中の人に心を染めしかば草葉に色も見えじとぞ思  
〔拾遺卷17・一一一六、一一一七〕(雑秋)

a は長年連れ添った夫婦が別れに際しての贈答。b は秋

風に散る紅葉の景に仕組んだ掛詞を用いて、心変わりしな

いと藤原時平に対し、疑わしいと伊勢がやり返したもの。

c は訪問したのに留守だったので、後に消息を取り交わす

男居士の歌で、万葉の交友歌に相当する。d は方違えのた

めに隣家に来た女性との贈答。この場合は女性からの誘い

かけに対して貫之がやり返したもので、通常の男女の贈答

とは逆である。

このように平安朝においても万葉の起居相聞に相当する

歌の贈答は行われており、むしろ平安朝のほうが盛んであ

る。ただし、「相聞」の部立てをとる万葉歌に対し、これ

らは「雑歌」や四季歌(季節歌)に分類されているが、平

安和歌では部立てを「恋」として限定したために、起居相

聞に相当するものがその分類から漏れたためである。

## 五 平安朝の随筆・日記に見られる起居相聞

起居相聞に相当する歌は、随筆や日記などにも多く見ら

れ、この方がむしろ状況がより鮮明である。

e 夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世に逢坂の関は

ゆるさじ(清少納言)

逢坂は人越えやすき閑なれば鳥も鳴かぬにあけて待  
つとか（頭弁・藤原行成）

枕草子（頭弁の職にまありたまひて）

f かたこひや苦しかるらむ山賤まがひのあふこなしとは見えぬものから（藤原道綱の母）

山賤のあふこ待ちいでてくらぶればこひまさりける  
かたもありけり（貞観殿登子）

蜻蛉日記（安和元年（九六八））

g 浮き寝せし水の上のみ恋しくて鴨の上毛うはげにさへぞおとらぬ（紫式部）

うちはらふ友なきころのねざめにはつがひし鴛鴦むすしぞ  
よはに恋しき（大納言の君）

紫式部日記（寛弘五年（一〇〇八）十一月十五日前後）

h 頼めしをなほや待つべき霜枯れし梅をも春はわすれざりけり（菅原孝標の女）

なほ頼め梅のたち枝は契りおかぬ思ひのほかの人も  
訪ふなり（継母）

更級日記（治安元年（一〇二一））

eの中国の故事を踏まえた贈答は弓削皇子と額田王の贈答に近似し、機知的なやり取りは天武天皇と藤原夫人のそれに近く、典型的な起居相聞歌となっている。fは安和元年（九六八）正月、村上天皇の没後、作者の家の西の対に下つてきた尚侍（貞観殿登子）との贈答で、片足にコブ（こ

ひ）のついた下僕の木彫り人形を媒介としたやりとり。gは土御門邸行幸後、一時里に下がった紫式部が自宅に引き籠もって孤独な悲しみに浸っていた頃、宮仕えの折に親交のあつた大納言の君を慕つての贈答で、交友歌に相当するもの。hは継母と別れた後の贈答。

平安朝の宮廷や貴族社会でも万葉の起居相聞に相当する歌がやり取りされており、歌を介して心の交流がなされた。ただe・fは宮廷生活を介しての贈答で、社交的・挨拶的であるのに対し、g・hはより私生活に密着しており、心情的である。特にgは恋歌と見紛う表現で、ここには起居相聞のさまざまな面が現れている。

## 六 平安朝に見られる起居相聞歌の特徴

こうしてみると、相手の言葉尻を捉えて返すという万葉贈答歌の様式はそのまま平安和歌にも継承されていて、様式的には変らないが、表現やことばの隔たりに歴然としたものがある。その一つは万葉に多用されているイモ・セの語が殆ど見られないことである。たとえば三代集に限ってみてもその傾向は変わらない（末尾の表1参照）。僅かに見られるのは次のようなものである。

i 隣より、常夏の花を乞ひに遣せたりければ、惜しみて、  
この歌をよみて、遣はしける

躬恒

塵をだに据へじとぞ思咲きしより妹とわが寝るとこ  
夏の花 〔古今巻3・一六七（夏歌）〕

j

つらゆき

うち群れていざ吾妹子が鏡山越えて紅葉の散らむ影  
見む 〔後撰巻7・四〇五（秋下）〕

k

歌奉れ、と仰せられし時に、よみて、奉れる 貫之

わがせこが衣春雨ふるごとくに野辺のみどりぞ色まさ  
りける 〔古今巻1・二五（春歌上）〕

l

題しらず

よみ人しらず

わがせこが衣のすそを吹返しうらめづらしき秋のは  
つかぜ 〔古今巻4・一七一（秋歌上）〕

m

よみ人知らず

梅の花よそながら見むわぎもこがとがむ許の香にも  
こそしめ 〔後撰巻1・二七（春上）〕

n

屏風に

能宣

散りそむる花を見すてて帰らめやおぼつかなしと妹  
は待つとも 〔拾遺巻1・五九（巻）〕

o

読人しらず

流ては妹背の山のなかに落つる吉野の河のよしや世  
中 〔古今巻15・八二八（恋歌五）〕

イモ・セはi・jに見られるような序詞やk・lのよう  
な枕詞に用いられたもの、m・nのように関心が季節にあ

るもの、oのように「妹背山」として詠まれるものなどで

あり、僅かの例を除いては起居相聞歌にも恋歌にも用いら  
れていない。その他、私家集を始め、歌合、日記、物語な

どの和歌についてもこの傾向は変わらない。例外として好  
忠集33首、和泉式部集（続を含む）14首、躬恒集13首、そ

の他若干あるが、それらも妹背川、妹背山として詠まれた  
ものが多い。

対する平安和歌の特徴は次のような歌に見られる。

p 女のもとより文月許に言ひをこせて侍ける

よみ人しらず

秋萩を色どる風の吹ぬれば人の心もうたがはれけり  
返し 在原業平朝臣

秋萩を色どる風は吹ぬとも心はかれじ草葉ならねば  
返し 〔後撰巻5・二二三、二二四（秋上）〕

q

太政大臣の白河の家にまかり渡り侍けるに、人の曹司

に籠り侍て  
白河の滝のいと見まほしけれどみだりに人は寄せじ  
物をや 中務

返し

太政大臣

白河の滝のいとなみ乱れつゝよるをぞ人は待つと言  
ふなる 〔後撰巻15・一〇八六、一〇八七（雑一）〕

万葉集ならばイモ・セとあるべき所を、p・qでは

「人」と三人称で表現している。末期万葉にも家持周辺の歌には「人」として二人称を三人称で表現するものも若干あるが、それがごく普通に見られるのが平安和歌の特徴となっている。鈴木日出男氏は、二人称の相手を「人」ということは第三者と区別しない言いまわしであり、自分以外はすべて他人という認識だという。さらに相手との具体的な関係を捨象し、観念的な表現をとることで、人間普遍の関係と、そこに生じる心情を見つめることになるという。この「自意識の表現」は古今集が拓いたものと見ていい。こうした平安和歌の表現は「歌合」などを通して形成されたと想定できる。具体的には次のような例に見られる。

夢にだに見ぬ人こひにもゆる身のけふりは空にみちやしぬらん  
〔民部卿家歌合一三三〕

夏虫にあらぬ我が身のつれもなき人をおもひにもゆる比かな  
〔寛平御時后宮歌合一六三〕

我が恋は深山がくれの草なれやしげさまされど知る人のなき  
〔寛平御時后宮歌合一六五〕

人をおもふ心のおきは身をぞやく煙たつとは見えぬものから  
〔寛平御時后宮歌合一六九〕

ほのに見し人におもひをつけそめて心からこそしたにこがるれ  
〔寛平御時后宮歌合一八五〕

あさかげに我が身はなりぬ白雲のたえてきこえぬ人を

こふとて

〔寛平御時后宮歌合一八八〕

民部卿家歌合（在原行平）は八八五年頃、寛平御時后宮歌合は八九三年以前の成立であり、これら九世紀後半の歌合は、ほぼ六歌仙の時代と重なることから見て、平安の和歌表現の規範となったと見てよからう。歌合は題詠であり、恋を主題に据えることで恋という事象を客体化して詠むことが行われた。つまり、歌合を通して具体的な人間関係を捨象した想念上の「恋」を詠むことが可能になったわけで、ここに文芸としての恋歌が成立したといえよう。

恋歌は平安朝の初期に一時公の場から姿を消すが、これは公の場にふさわしい恋歌のあり方を模索した結果見出された表現であり、以後この詠みぶりは平安和歌の規範となっている。この表現方法が定着すると、先に見たP・Qのように、具体的な人間関係に基づいたやり取りにも、この規範を踏まえた詠みぶが見られ、それは平安和歌の全体に及んでいる。

とはいえ、平安和歌にイモ・セの語が使われなかつたわけではない。先にも言及したように、一つには序詞や枕詞、或いは妹背山、妹背川のような熟語として用いられているが、その他に恋歌には次のように用いられている。

はるさめのやまずふりおちてわがこふるわがいもひさにあはぬころかな  
〔赤人集二二三〕

いもがいへぢわれわすれめやしひきの山かきくもり  
ゆきはふるとも (家持集一四八)

かげろふのひとめからにやあやしくもおもわすれせぬ  
いにも有るかな (古今六帖八二三)

みちのくのつつじの岡のそまつづらつらしといもをけ  
ふぞしりぬる (古今六帖一〇四二)

よもすがらなづさはりつるいもがそでなごりこひしく  
おもほゆるかな (古今六帖二五九五)

山のはに月もいでぬべしいまだにもいもがりゆかかんお  
やにまうすな (古今六帖三〇九〇)

わがせこはきませりけらしわがやどの草もなびけり露  
も落ちたり (古今六帖一三二六)

あぶくまにきりたちわたりあけぬともせなをばやらじ  
まてばすべなし (古今六帖六五五)

これらは赤人集、家持集、とりわけ古今和歌六帖に多く見られる。古今和歌六帖は作歌の手引き書であつたらしく、細かな題が付けられて分類されており、第五帖の「雑思」には「わぎもこ」「我がせこ」の題（小分類）も見られる。ただ、この項目に採録された歌の多くは万葉歌とその異伝歌だが、六帖全体ではイモ・セを用いた万葉歌以外のものも含まれている。ここに示した六帖歌はその一部である。この事実は平安朝においても、なお一部に万葉的世界が息

づいていたことを物語つていよう。想念上の恋歌を規範とした歌とは別に、実生活に根ざした恋歌で、これらは古今集の序にいう「色ごのみの家」に「埋れ木」となつて、人知れぬものと評されたもの的一端で、平安の都市に生活する民衆の間（主に下級官人か）で機能していたらしい。

## 七 まとめ

相聞歌（恋歌）は初期万葉の頃に定着し、折に触れて贈答されているが、そこから派生した起居相聞歌も僅かではあるが、奈良朝以前の宮廷社会に始まり、やがて貴族・官人（知識人）社会に波及し、贈答されるようになった。それが盛んになるのは奈良朝以降であり、男女間よりもむしろ同性同士、とりわけ男同士の贈答が目立っている。

この男同士の贈答は「交友歌」といわれているもので、恋歌的な表現が見られることから女性の立場で詠まれたといわれるが、それは親交（親密な関係）を深めるための表現と見るべきものである。ここでは男同士で「セ（コ）」と称したり、女同士で「イモ」と称するなど、男女の恋歌で用いられるイモ・セの用法とは違った用いられ方がされており、起居相聞歌を特徴づける表現となつている。とりわけこの動向は末期万葉に多く見られるが、この起居相聞歌の特徴は平安和歌と対比するといつそう鮮明に見えてくる。

平安朝の和歌は、勅撰集を始めとした歌集の類や随筆、日記などにもあるが、万葉の起居相聞に相当する日常の起居を問う類のものは、歌集の詞書きや随筆・日記の場面（状況）から類推すると、無数といつてよいほどに抽出することが出来る。生活の中にすっかり定着していたわけであり、和歌の様式面では万葉のそれをそのまま継承しているのだが、表現の隔たりは大きい。

平安朝初期（九世紀前半）に、漢風謳歌時代とも言われる漢詩文が隆盛を極めた時期があり、和歌はこの時期公の場から姿を消すが、再び公の場で詠まれるようになった時にはその場に耐えうる表現として一新されたものとなつていた。恋歌や起居相聞歌に相当するものも、復活した和歌は万葉のそれとは違い、初期の歌合に見られるように具体的な状況を伴わずに文芸意識の下に再生されたものであった。これを規範とした平安和歌は実生活での具体的な状況下で詠まれても、大方は万葉歌のような表現をとることはなかつた。

こうした宮廷貴族社会とは別に、民衆（都市生活者）の間では実生活でのコミュニケーションの手段として、万葉的恋歌・起居相聞歌が伝わっていたようだ。古今六帖などのイモ・セの呼称をとる歌はその痕跡であろう。

このように見てくると、万葉の起居相聞は平安朝のそれ

に相当する歌と対比した時、恋歌に紛れながら一方でそれとは違う世界を形成していたことが分かるし、相互の呼称の面から見ると、男女が紛れてしまうような表現は万葉の起居相聞の特徴であつたことになる。

万葉の相聞は恋歌と起居相聞とから成り、表現上相互に紛れているものもあるが、とりあえず両者を分けて考えてみると、起居相聞歌は恋歌とは違つた和歌生活の世界を形成していることが見えてくる。

#### 注

- (1) 高野正美「社交歌としての恋歌」『万葉集作者未詳歌の研究』（笠間書院 昭57）
- (2) 呉 哲男「万葉の『交友』——大伴家持と同性愛——」日本文学（1995・1）  
「万葉集の歌を詠むという行為をどう問いつるか——『交友』論をめぐって」国文学 解釈と教材の研究 第41巻6号（平8・5）
- (3) 辰巳正明「交友の詩学」『万葉集と比較詩学』（おうふう 平9）
- (4) 池田三枝子「家持の交友歌」古代文学37（昭57年度）
- (5) 澤瀉久孝『萬葉集注釋卷第三』（中央公論社 昭33）
- (6) 青木生子「男性による女歌——万葉集における——」万葉168号（平11・3）
- (7) 鈴木日出男「古今集」の『人』について『古代和歌

〔本文〕 日本書紀は日本古典文学大系、万葉集(一部改めた)・枕草子・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記は日本古典文学全集、古今集・後撰集・拾遺集は新日本古典文学大系、赤人集・家持集・民部卿家歌合・寛平御時后宮歌合・古今和歌六帖は新編国歌大観によった。

〔表1〕 \*印：妹背の山

拾遺集	後撰集	古今集	計
31	6	6	計
万葉 よみ人知らず 22* 貫之 2(春、雑秋*) 能宣 2(春、冬) 元輔 1(春) 輔相 1(物名) 伝人麿 1(物名) 大式国章 1(哀傷)	よみ人知らず 4(春秋*、雑*) みつね 1(春) つらゆき 1(秋)	万葉 1(序) みつね 1(夏) よみ人知らず 2(恋*) 大歌所御歌 1 墨滅歌 1	イモ(首)
7	1	4	計
万葉 5 よみ人知らず 1(恋) 曾根好忠 1(恋)	万葉 1	貫之 1(春) よみ人知らず 1(秋*) 東歌 1 墨滅歌 1	セ(コ)(首)

〔表2〕 起居相聞の歌 ○異性間の贈答 ●男性間の贈答 ▲女性

間の贈答 \*送別の宴 ★交友歌

〔第一期〕

○1 天智天皇U鏡王女(2・211) 相聞

○2 天武天皇U藤原夫人(2・234) 相聞

〔第二期〕

○3 弓削皇子U額田王(2・213) 相聞

\* 4 大神大夫U?(9・255) 相聞

\* ●5 大神大夫↑阿部大夫(9・273) 相聞

● a わが背子(長屋王↓?) (3・266)

● b わが背子(石川大夫↓長田王) (3・277)

● c わが背の君(春日老↓丹比笠麿) (3・266)

〔第三期〕

6 大伴旅人U?(5・26) 雑歌

● 7 大伴旅人U藤原房前(5・80) 天平元年 雑歌

わが背子(23)

○ 8 葛城王U薩妙觀命婦(20・245) 天平元年

\* ● 9 大伴旅人↓丹比県守(4・255) 相聞

\* ● 10 大伴百代等↓駆使(4・257) 天平二年 相聞

\* ● 11 府の官人等↓大伴旅人(4・256) 相聞

★ ● 12 大伴旅人↓沙彌滿誓(4・253) 相聞

○ 13 阿倍老人↓母(19・247) 天平五年

d わが背の君(??) ↓入唐使(19・245)

● 14 余明軍↓家持(4・259) 相聞

〔第四期〕

○ e 我妹子(大伴駿河麻呂U坂上郎女)(4・261)

○ 15 大伴駿河麻呂U坂上郎女(4・262) 相聞

○ 16 安部虫麻呂U坂上郎女(4・263) 相聞

○ f 我妹子(大伴駿河麿↓坂上郎女)(3・263)

我妹子(26)

★ ● 17 大伴家持↓(交遊)(4・260) 相聞

▲ 18 坂上郎女↓坂上大嬢(4・254) 相聞

▲ 19 坂上郎女↓坂上大嬢(4・251) 相聞

20 忌部黒麻呂↓友(16・246)

● 21 桜井王U聖武天皇(8・264) 秋相聞

● 22 大伴家持U藤原久須麻呂(4・266) 相聞

▲ 23 田村大嬢↓坂上大嬢(4・255) 相聞

我妹子(25)



我が思ふ妹(七五)

妹(七五)

▲24 田村大嬢↓坂上大嬢(8・四九) 春相聞

▲25 田村大嬢↓坂上大嬢(8・五八) 春相聞

▲26 田村大嬢↓坂上大嬢(8・六三三) 秋相聞

▲27 田村大嬢↓坂上大嬢(8・六六) 冬相聞

▲28 紀女郎↓友(4・七三) 相聞

▲29 水主内親王↑石川内命婦(20・四九)天平九年?

●g わが背子(橘諸兄↓巨曾部対馬)(6・三三)

○30 大伴家持↑坂上郎女(8・二六九)天平十一年 秋相聞

●31 大伴書持↑大伴家持(17・三九)天平十三年 天平十年

○32 坂上郎女↓大伴家持(17・三七三)天平十八年 天平十年

●h わが背子(家持↓大伴池主)(17・三九)

★33 大伴家持↑大伴池主(17・三五)天平十九年 天平十九年

●34 家持↓秦八千島(17・三九九)

●35 内蔵繩麻呂↑家持(17・三九七)

●36 家持↑池主(17・四〇六)天平十九年

●37 池主↑家持(18・四三七)天平二十一年

○38 坂上郎女↓大伴家持(18・四〇八)天平感宝元年

●39 家持↓久米広繩(18・四二一)

●40 池主↓家持(18・四三三)

●i わが背子(家持↓秦石竹)(18・四三)

●j わが背子(家持↓?)(19・四三)

★41 家持↓池主(19・四七)天平勝宝二年

★42 家持↓池主(19・四九九)天平勝宝二年

わが背子(三九〇)

わが背子(三九七)

わが背子(四〇六)

わが背子(四一三)

わが背子(四二〇)

わが背子(四二七)

わが背子の君 家持↑池主(四三〇)

わが背子の君 家持↑池主(四三三)

わが背子(四三七)

わが背子(四三九)

わが背子(四四一)

わが背子(四四三)

わが背子(四四五)

わが背子(四四七)

わが背子(四四九)

わが背子(四五〇)

わが背子(四五二)

わが背子(四五四)

わが背子(四五六)

わが背子(四五八)

わが背子(五〇)

妹(四二)

▲44 坂上郎女↓坂上大嬢(19・四三〇) 天平勝宝二年  
●k わが背子〔恵行↓?〕(19・四三〇)

●l わが背子〔家持↓久米広繩〕(19・四三三)

●m わが背子〔家持↓紀飯麻呂〕(19・四三五)

天平勝宝三年

●n わが背子〔家持↓置始長谷〕(20・四三三)

天平勝宝六年

●o わが背子〔大原今城↓家持〕(20・四四二)

天平勝宝七年

●p わが背子〔家持↓橘諸兄〕(20・四四四)

天平勝宝七年

●q わが背子〔家持↓橘奈良麿〕(20・四四五)

天平勝宝七年

●r わが背子〔中臣清麿↓家持〕(20・四四九・四五〇)

天平宝字二年